

# 821 てんでん のこ 遺された大川小 ①

## 遺構公開日、語り部が抱いた不満

10年前、土砂やがれきに埋もれていた校舎が、震災遺構として整備される日が来るのは思いもしなかった。

東日本大震災の津波で児童・教職員84人が犠牲・行方不明となった宮城県石巻市の旧大川小学校。一般公開が始まった今日18日、語り部活動を続けてきた「大川伝承の会」共同代表の佐藤敏郎(57)は感慨深げだった。

子供たちはしゃべり声に満ちた学校だった。あの日、断続的に揺れが続く中、子供たちは先生たちの指示で、地震発生から約50分後まで校庭で待機させられた。移動を始めた直後、2階建ての校舎を超える高さ約8・6メートルの津波が1帯を襲った。

周辺の土の中から、大勢の子供たちがランドセルと一緒に見つかった。6年生だった佐藤の次女(当時12)も犠牲になった。「二つらくて、しばらくは学校に近づきたくなかったし、見たくもなかった」。校舎を残したいと思っていた遺族は少なかつた。

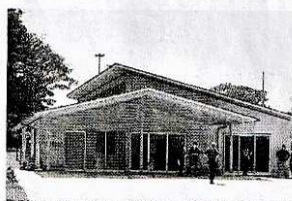
それでも「悲劇」の現場として、全国各地から大型バスで見学者が次々と押し寄せた。観光地に来たかのような見学者のふるまいに、心を痛める遺族もいた。

当時は、ここで何が起きたのかを知らせる案内板はなく、解説してくれる人もいなかった。見学者はよくわからないまま、「かわいそう」「仕方がなかったね」といった感想を持って帰って行く。

それが歯がゆかった。なぜ「悲劇」が起きたのか。佐藤ら遺族は教訓を持ち痛めてほしいという思いで、見学者の前に説明に立つようになつた。壊れた校舎だけがほとんど残されたこの場所は、かつて家々が立ち並ぶ街だったことも知ってはしかなかった。

被災した校舎、多くの児童や教職員が犠牲になったという事実は、学校現場での防災意識の高まりを呼び起こしていた。

2016年3月、当時石巻市長だった亀山紘(78)は震災遺構として校舎全体を保存する考えを表明した。校舎をめぐるのは、保存か、解体か、遺族や住民を二分する議論が続いたが、教訓の伝承や将来の防災教育に役立つと判断された。



震災遺構大川小学校のそばに新設された展示施設「大川震災伝承館」

19年10月、学校側の津波対策の不備を認めた仙台高裁判決が確定。翌20年4月に遺構整備の工事が始まったが、市が肝心の展示内容を示したのは、それから半年以上もたった同年11月。当初の案では「市や学校の事前防災の不備を認定した仙台高裁の判決に触れていなかった」と佐藤は明かす。

佐藤には長年、校舎前で語り部を続け、伝えるための言葉を工夫し、資料や写真を選んで紹介してきたという自負がある。教訓のポイントや判決文を解きほぐした文案をまとめ、市に提出。何度も話し合いを重ねてきた。

今日18日、震災遺構の一般公開が始まった。校舎内には入れないが、教室や廊下の様子を近くから見る事ができる。敷地内に建てられた「大川震災伝承館」では、訴訟の経緯や大川地区の被害状況などが紹介された。それでも、佐藤には改めて満足のいく展示ではないと感じられた。

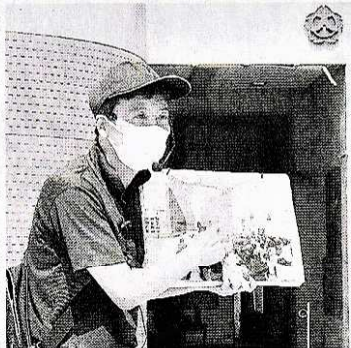
なぜ大川小が防災に備えられなかったのかの検証が足りない。裁判の判決文をもっと分かりやすく伝える工夫をすべきでは。校舎保存の経緯や今後の学校防災に生かすべき具体的な教訓を示すべきではないか。

「市が何もしてこなかったわけではないけれど、不十分。内容をアップデイトし、伝えるべきことを伝えていく」。報道陣を前に、率直な思いを打ち明けた。

校庭には市が用意した真新しい案内板が据えられている。佐藤ら遺族が案内板を立てていたが、開所直前に自ら撤去していた。

(原篤司) 文中は敬称を略します。

東日本大震災から10年を経て、一般公開が始まった「震災遺構大川小学校」。遺族や地域の人の思いをたどる。



遺構が一般公開された18日、校舎前で語り部として話す佐藤敏郎(57)が震災伝承館で、校舎内部の写真などを見る人たちに話している様子も宮城県石巻市釜谷